

# テレビの進化と現在の子どもの発達問題

## - 生活科学的アプローチ -

中井 孝章

大阪市立大学大学院生活科学研究科

### Evolution of Television and the Development Problem of our Children at Present

Takaaki NAKAI

*Osaka City University Graduate School of Human Life Science & Faculty of Human Life Science*

#### Summary

As television evolves into high-powered as well as digital television broadcasting every day, children on the other hand, especially infants who view for a long time, suffer from developmental delay (the language delay). This new disease has become an object of public concern. An issue has to be made of the “media-form” of the television, i.e., the television itself, before the right and wrong of the contents of a TV program can be examined. The following have been discussed, (1) prevention of the communication between parents and children (Condon, W. called it interactional synchrony which is embedded in communication) and of human relations on the basis of it, (2) the delay of language development considering underdeveloped image as a cause, (3) the perverted “feeling education” which makes it a usual state to turn and expose our feelings to others, (4) the animated human understanding which makes it impossible to understand the clear expression of others, (5) the physical and mental damage by superfluous stimulus of an image and a sound, and (6) the expansion of the consumption desire by television commercials and so on.

As a measure against the influence of television on children, especially infants (children aged two years and under), it should be a principle that they are shown neither television nor any video. In addition, a joint attention of the parent and child, as a traditional culture of our country, and the use of picture books (a movement of book start), as the modern version, should be considered as other measures. However, the establishment of a television guideline for children who view and listen to television for a long time is desired in this country.

Keywords : 長時間テレビ視聴 *the television viewing and listening for a long time*  
 新しい言葉遅れ *the neo delay of the language development*  
 共同注視 *Joint attention*  
 相互作用の同期性 *Interactional synchrony*  
 感情教育 *A sentimental education*

## ・テレビ視聴の現在

わが国では2003(平成15)年12月から地上デジタル放送が、関東、中京、近畿の三大広域圏で開始された。それ以外の地域でも2006年末を目途に放送が開始される予定となっている。それに伴い、地上アナログ放送とBSアナログ放送は2011年中に終了するという。地上デジタル放送は、まさにIT時代の申し子である。というのも、それを通じてテレビがより一層身近で使いやすいIT端末になるからである。その意味で、地上デジタル放送は、IT社会のゲートウェイにほかならない。

一方、地上デジタル放送の開始に伴い、それを見るための、マルチメディアとしてのテレビが市場に登場してきた。地上デジタル放送専用のテレビは、ほぼ24時間放送がなされる上に、何十、何百チャンネルといった選択幅がある。しかもそれは、乳幼児ならば体全体を包む込むほどの大きさを有する、大型カラーテレビである。大きいものならば、30インチを超えるものさえある。また、現在のテレビは、高画質、高音質のものが多く、場面も小刻みであり、盛り込まれる内容も豊富に、その半面、細切れになっている。今や、テレビは視聴者の目をいかに長く引きつけられるかを求めて、瞬間的に様々な場面を変容させ、視聴者を刺激してくる。これから生まれてくるすべての子どもたちは、乳幼児の頃からこうした高画質、高音質のテレビに接することになるのである。

ところで、そうした高性能のテレビに接していない(あるいは、ほとんど接していない)子どもたちでさえ、すでに1日の大半をテレビ視聴で過ごしているという。例えば、現在、4~6歳児が1日にテレビを見る時間が約2~3時間であり、小学生にもなると、1日平均3時間10分もテレビを視聴しているという。4~6歳児の場合、親たちと接している時間よりもテレビの画面を見ている時間の方がはるかに長い。小学生の場合は、単純計算すると、1年間にテレビを視聴しているのは、1095時間となり、これは学校の年間授業時間よりも多い(世界のトップである)。しかも、純粋なテレビ視聴以外にも、ビデオを見たり、テレビゲームをしたりする時間を加算すると、実際に、小学生がテレビ画面を見ている時間は、1日平均4時間を超えることになる。

ところで、一昔前のテレビおよびそれを見る子どもたちはどうだったのであろうか、次に筆者自身のテレビ体験を振り返ってみることにしたい。筆者が乳幼児であった1960年代初頭、テレビはすべて白黒で映りも大変悪かった。それはスローペースであり、幼児にも高齢者にも享受可能なものであった。しかも、サイズは15インチくらいがごく平均的な大きさであり、その粗末な画面を居

間に置いて家族全員で囲んで見ていた。わが国のテレビ放送が開始されたのが、1953(昭和28)年であったことを考えると、1958(昭和33)年生まれの筆者が幼児の頃、視聴したテレビは技術面で未熟であったと言える。また、テレビ放送は、現在のように常時流されているわけではなく、放送番組の不足という事情もあって、昼下がりの一時期に放送が休みになる時間帯があった。当然のことながら、夜もかなり早く終了していた。こうした状況にあったため、筆者をはじめ当時の子どもたちにとって、テレビは日常生活の中のほんの1コマに過ぎなかった。とはいえ、彼らはその限られた時間やそこで映し出される物語(フィクション)を非日常的なものとして夢中になって享受していたと思われる。

このように、現在のテレビおよびそれを見る子どもたちと、一昔前のテレビおよびそれを見ていた子どもたちとを比較するとき、雲泥の差があることがわかる。「テレビ」という言葉そのものは同じであっても、その内実はまったく異なったものと理解すべきなのである。ところで、2004年2月、地上デジタル放送の開始に合わせるように、日本小児科医会が新聞やインターネットを通じて「<テレビ>2歳までは控えめに」という提言を行った<sup>1)</sup>。正確には、それは「子どもとメディアの問題に対する提言」として発表したのであるが、その内容とは何よりも、乳幼児がメディア(テレビやビデオ)に接する時間を制限するようというものであった。日本小児科医会は、この提言を行うにあたって、テレビやビデオを見る機会が著しく多い乳幼児に、顕著な言葉の遅れや他人とのコミュニケーション不全(視線を交わせないこと等を含めて)などの発達問題が多くみられることを定期検診や膨大な実態調査等を通じて把握していた(わが国に先駆けて地上デジタル放送を実施していたアメリカでは、乳幼児に対するテレビの影響の実態調査に基づいて「2歳まではテレビやビデオを見せてはならない」という提言をすでに行っており、本医会は、医学的立場からその提言を継承したものだと言える)。

それでは、現在の高性能のテレビは、実際、子ども(特に、乳幼児)の発達に対してどのような影響を及ぼしているのであろうか。ここでは、テレビが子どもの発達に及ぼす影響や問題点を様々な資料や実験を通じて論述するとともに、その対策についても言及していくことにしたい。ただし、テレビや地上デジタル放送に関する単なる評論にとどまるのではなく、テレビが子ども(乳幼児)の発達に与える影響を「現在の子どもの抱える生活問題」として具体的に捉えていくことにしたい。その意味でここでは、テレビにおける子どもの発達問題を生

活科学の学問的立場から考えていくことにしたい。その立場とは、乳幼児から高齢者まですべての人々がもっている現在の生活問題を発見するだけでなく、それを解決したりそのためのサポートを提言したりするものである。

## ・テレビの普及と「言葉の遅れた子ども」の登場

### 1. テレビの普及に伴う「新しいタイプの言葉遅れの子ども」とその特徴 乳幼児を中心に

ところで、土谷みち子は、1999（平11）年、幼児教室に通う3歳児、159名についてテレビやビデオ視聴時間の調査を行った。159名の1日あたりのテレビ・ビデオの視聴時間は、3時間以上が62%、4時間以上が27%であった。それを示したものが図1<sup>2)</sup>である。さらに、図2<sup>3)</sup>は、テレビ・ビデオの視聴と外遊びの時間の関係を示したものである。

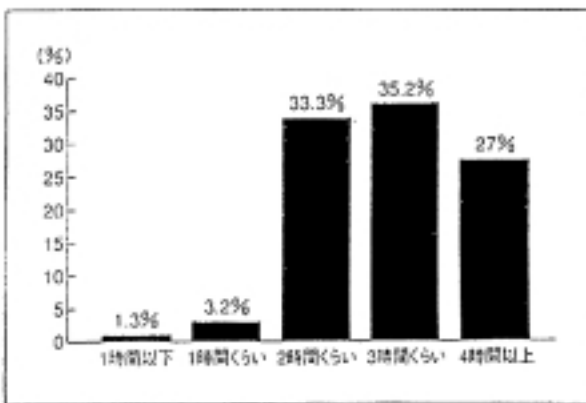


図1 テレビとビデオの合計時間

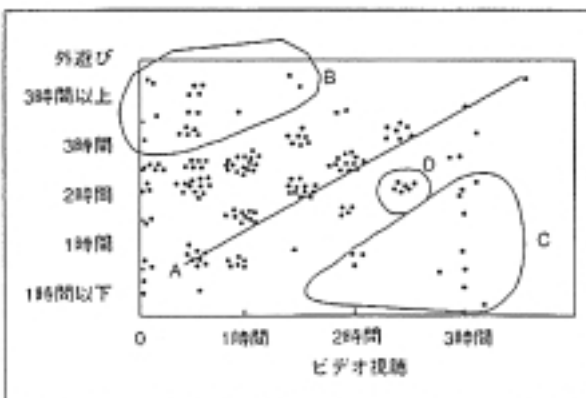


図2 テレビ・ビデオ視聴と外遊びの時間（1日）

図2のCに示されるように、その中の16名は外遊びよりも視聴の時間が相当長く、特に乳児期から長時間繰り

返し、1人で見ている子ども10名の行動観察では、言葉がしゃべれない、表情が乏しい、突然かんしゃくを起こす、友達と遊べない、視線が合わない、ごっこ遊びができない、オウム返しに言うなど言語、情緒、コミュニケーションに問題がみられたという。

こうした「新しいタイプの言葉遅れの子ども」に共通しているのは、運動機能の発達が年齢相応でありながら、言葉がほとんど出ず、名前を呼んでも振り向かず、コミュニケーションをせず、あるいはコミュニケーションに対してきわめて消極的であり、社会性の発達が見られないことである。こうした子どもに共通する家庭環境は、次の通りである<sup>4)</sup>。乳児期からテレビやビデオに子守りをさせていた。朝から晩まで、ほとんどテレビのつきっぱなしの生活をしている。子どもは、テレビのない生活時間をほとんど経験していない。子どもが早期教育のビデオにはまっている。両親そろってテレビ好きである。

事例を挙げると<sup>5)</sup>、3歳児のA子は、1歳8ヶ月の頃、アンパンマンのテレビやビデオにはまっていた、1日7時間から8時間は見ていた。A子は大変おとなしい性格であるため、親とのコミュニケーションを、それとわかる形で求めないまま過ごしてしまう。そのうち、A子は家族（親）と目を合わせようとしくなくなり、言葉が消失し、返事もしなくなった。

また、2歳児のB子の場合には、彼女が1歳のとき、母親は仕事に出るようになった。1歳半のとき、新しいテレビとビデオを買って以降、父親と母親はテレビに夢中になった。朝は7時にスイッチを入れ、昼間もつけっぱなし、夜も遅くまでテレビづけの生活になってしまったという。

6歳児のC男は、ウルトラマンのビデオが大好きで1日7時間もテレビやビデオの視聴をしていた。彼の場合、生後8ヶ月目から1日中つけっぱなしだった。そのせいで、C男は、小学校に入っても言葉がほとんど出ず、うまくコミュニケーションをとることができない状態にあるという。

こうした「新しいタイプの言葉遅れ」は、難聴、運動発達の著明な遅れ、あるいは原因の明らかな知的障害を除いた言語発達遅滞を対象とする。運動発達や日常生活習慣の獲得は、普通に進んでいるが、言葉の発達が特に遅れていて言語理解が乏しい、コミュニケーションがとれない、友人と遊べない、こだわりが強い、少しもじっとしてられないなど集団生活の中で困難さを感じるといった子どもたちである。

こうした言葉遅れの子どもたちは、医学書に書かれて

いる小児の言語遅滞の分類にあてはまる。その分類は表1に示される。

表1 言語遅滞の分類

	発語 (表出)	言語理解 (受容)	対人関係 (社会性)	診 断
(0)	正常	正常	正常	正常 (※基準)
(1)	遅れ	正常	正常	表出性言語遅滞 単純性言語発達遅滞
(2)	遅れ	遅れ	正常	受容性言語遅滞 (※高度の難聴)
(3)	遅れ	遅れ	遅れ	自閉性言語遅滞 精神遅滞 (※高度の知的障害)

表1に沿って、順次、説明すると、まず(1) 表出性言語遅滞は、親の言うことは何でも理解できる半面、発語の面において遅れがみられる。(2) 受容性言語遅滞は、親にはなついており、コミュニケーション面では問題がない半面、発語と言語理解がともに遅れる。たとえば、高度の難聴の子どものように、明確な原因がある場合がほとんどであるが、ときにはテレビやビデオの過剰視聴によっても生じる可能性がある。(3) 自閉性言語遅滞は、親にもなつかず、発語・言語理解ともに遅れている。普通、これは高度の知的障害をもつ子どもにみられる。前述した、A子やB子、C男がこれにあたるが、彼らは高度の知的障害もなく、本来の自閉症でもないにもかかわらず、発達上の問題点がみられる。彼らは本来の自閉症ではなく、家庭環境の影響によって自閉的な状態にとどまっている可能性が高い。見方を換えれば、彼らは幼い頃から継続的に自閉的環境に置かれただけなので、十分治療が可能である。むしろ環境改善するだけで自然に治癒するケースも少なくないと言われている。

## 2. 「新しい言葉の遅れ」と自閉症

### 共通点と相違点

今から40年前、自閉症は5000人に1人の割合であった。ところが、現在は200～300人に1人の割合となっている。これは、単に自閉症児が増加したという事実を意味するのではなく、むしろ自閉症児とよく似た症状をもつ子どもが増えたことを示しているのではないかと推測される(それはまた、自閉症児とカウントされてもおかしくない子どもが増えたことを意味する)。

ところで、自閉症の場合、知的能力において遅れのない部分を多くもっているが、またはときに並外れて優れた知的能力を発揮しながらもコミュニケーション能力

を発揮することができない。対人関係が乏しい言語遅滞に当てはまる子どもたちはまさしく自閉症であり、回復は期待しがたい。これに対して、自閉症とよく似た症状をもつ「新しい言葉の遅れ」の場合、乳児期から長時間、テレビやビデオを繰り返し1人で見ているため、次のような特徴をもっている。すなわち、その特徴とは<sup>6)</sup>、言葉がほとんど出ない、コミュニケーションがとれない、遊びが限られている、友達と遊べない、友達関係が乏しい、表情が乏しい、気持ちが通わない(感情面)、積み木などを何かに見立てる遊びができない、自分から話しかけようとしめない、ほかの子どもが近寄ると逃げる、視線を合わせない、ごっこ遊びができない、突然痙攣を起こす、である。

以上のように、「新しい言葉遅れの子ども」は、運動機能の発達には特に問題はなく、知能的にも問題はみられないにもかかわらず、以上のように、言葉、コミュニケーション、感情面で多くの問題がみられるという。

しかしながら、早期のうちにテレビ・ビデオの視聴を止めて家族(母親)との親密なコミュニケーションを経験できるようになれば、大半は回復・改善をみせると言われている。つまり、こうした子どもは、長時間のテレビづけの生活環境に起因する自閉の状態に置かれている。

従って、「新しい言葉遅れの子ども」が激増している背景には、親の世代の「テレビ依存症」があると受けとめるべきである。1日の半分が睡眠という生活パターンの中で、乳幼児は、1日に4時間以上もテレビ・ビデオに子守りをされ、人間としてのコミュニケーションをしていない、すなわち4人に1人は、起きている時間の3分の1以上をテレビ・ビデオと過ごしているのである。こうした状態を放置しておいて何らかの問題が生じないはずがない。

以上、新しいタイプの発達遅滞(言葉の遅れ)の子ども現状を概観してきた。それでは次に、テレビ視聴が子どもに与える深刻な影響について述べていきたい。ただその際、テレビのどの側面を問題にするかということから吟味していきたい。

## ・テレビが子どもに与える深刻な影響

### 1. テレビという「メディア=形式」の批判的検討

従来、テレビの内容(テレビ番組の内容)については様々な観点から分析され検討されることはあっても、テレビというメディア、さらにはテレビという存在そのものが分析され検討されることはほとんどなかった。従っ

てここでは、テレビという「メディア=形式」について徹底的に検討していきたい（なお、内容についても必要に応じてその都度ふれていくことにしたい）。

一般的には、“良質な内容のテレビや教育的に配慮されプログラムされたビデオであれば、垂れ流しのテレビ放送とは違ってむしろよい効果があるのではないか”と言われることが少なくない。例えば、＜セサミストリート＞のような子ども向け番組は、教育上好ましいと言われている。あるいは、反対に、“残酷な内容のテレビやビデオが子どもの情緒に悪影響を与える”という話もよく聞く（最近では、2004年に起きた長崎同級生殺人事件の原因の1つとして＜バトルロワイヤル＞というビデオ映画が問題視されている）。

しかし、一方的な情報または刺激という意味においては、どのような内容であろうと、いかに“教育的に”プログラムされていようと、コミュニケーション能力の発達を阻害するという結果はまったく同じでしかないと考えられる。テレビに関する議論の大半は、テレビ番組の内容だけに目を向け、内容の悪影響を論じるという域にとどまっているものが少なくない。乳幼児にとっては、テレビ番組の内容いかんにかかわらず、テレビがついている（子どもが小さい時からテレビを見る）ということそのものからくるのびきならない影響が存在するのである。

## 2. テレビ視聴の時間と時刻がもたらす問題

前述したように、1日に何時間もテレビやビデオを視聴することに伴う、子どもへの影響は少なくない。この点について次に詳述していきたい（事実、次に述べる子どもの発達問題や弊害の大半は、これに関連している）。

テレビ視聴の時間の問題点としてまず指摘されることは、テレビ視聴が退屈しのぎ、すなわち時間消費の安直な手段になっていることである。現在、子どもたちにとってすら、家庭は、食事して風呂に入って眠って、その他の時間はテレビやビデオで時間つぶしする空間になり果ててしまっている。テレビ視聴を中心とする生活は、個人を単位とする、消費主義的価値観に基づくものであるがゆえに、共同体、特にミニマムな共同体としての家族とさえ対立する。消費主義的価値観においては、家族が家族を手段とみなすことを助長するため、家庭は互いの絆から成り立つ共同体として機能し得なくなる（その歯止めとして家族の成員同士が「家族する家族」<sup>7)</sup>、すなわち家族としての役割を意図的に演技することが求められる）。テレビはこのように弱体化した共同体の崩壊を助長させることにつながる。

また、テレビを見ている時間だけでなく、テレビを見る時刻もまた、子どもの発達に多大な影響を与えると考えられる。幼稚園の子どもたちの中で、夜8時以降もテレビを見ている子どもの方が見ていない子どもと比べて、体格、運動能力、食生活の面で問題点が多いと言われている。その理由は、次の通りである。夜遅くまでテレビを見ていれば当然、就寝時刻が遅くなる。テレビを切っても、頭はまだ興奮しているので、すぐには眠れない。そして、眠るのが遅くなれば、朝なかなか起きられない。無理して起こせば機嫌が悪く、ぐずぐずして、なかなか朝食を食べないし、時間もないのでつい少ししか食べないとか、子どもの好きな物ばかり与えたり、ときには朝食抜きになったりする。すると、登園してから元気がなくて活発に動かないので、運動能力も伸びない。動きが少ないので、おなかがすかず、食欲も出ないので、均整のとれた体格にならないというように、すべての面で悪循環となってしまふ。つまり、子どもたちが夜遅く、しかも長時間、テレビを視聴することにより、彼らの一部は不眠症となり、生活リズム（体内時計）を狂わせてしまうことになる。そして、こうした狂いは、不登校や朝食抜きにつながる。

子どもの発達と睡眠に関する研究によると<sup>8)</sup>、とりわけ乳幼児の場合、夜、寝ているうちに成長すると言われている。特に、成長ホルモンは平均、午後9時から12時の間に分泌される。こうした点でも、夜更かしは乳幼児の成長発達に深刻な影響をもたらすのである。

さらに、子どもたちが長時間、何の目的もなくだらだらとテレビを見ながら行動することがある。ただ、こうして行うことのできる活動は、習慣化した単純な仕事か記憶に頼る勉強だけなのである。

それでは次に、長時間のテレビ視聴に伴う子どもの様々な発達問題について逐一、述べていくことにする。

## 3. テレビの効用とその落とし穴

### テレビに対する誤った認識と錯覚

ところで、テレビは居ながらにして、世界各国のさまざまな事件や風景を見せてくれる世界の窓である。それゆえ、教養に、娯楽にと、私たちの生活の奥深くにまで入り込み、いまやテレビを抜きにしては、私たちの生活は成り立たないかのように思われる。私たちは「いつの間にか、テレビを見ていないと、世の中の動きに同時的共振ができなくなるという不安感覚を身につけてしまった。それがテレビの日常化である。」<sup>9)</sup>ところが実は、世界の新たな知識や情報をリアルタイムで伝えてくれるというテレビの最大の効用にこそ、落とし穴がある。一

言で言うと、テレビは「ためになる」という誤解と錯覚である。

大都市圏の子どもの実態調査を行ったところ<sup>10)</sup>、テレビについて母親が次のような考えをもっていることが明らかになった。次に示すものは、調査票に添えられていたコメントをまとめたものである。

ある母親は、日頃、テレビがついているお陰で、子どもが物知りになって、親が教えない言葉でさえも、知っている、ウチの子どもの言葉は遅れていないと述べた。また、他の母親は、テレビやビデオを常時つけていた方がつけないよりも、子どもが言葉や数字など多くの知識を早く覚えるからよいと述べた。さらに、他の母親は、テレビは世界中の情報を入手できるから、つけておいた方が子どもが国際感覚を身につける上で有益なのではないかと述べた。

いずれの場合も、母親(親)は、テレビが世の中の最先端を行っているような気がするがゆえに、自分たちが話しかけるよりも、テレビを見せておいた方が子どもたちが利口になるのではないかと錯覚している。

一方、子どももまた、テレビが大好きで、生後6ヶ月頃から、テレビをつけておけば、おとなしく見ている。1歳、2歳になってくると、画面を見て、まねして踊ったり、歌ったり、コマーシャルなどすぐに覚えて繰り返したりする。それで、大人はついつい子どもにテレビを見せておけば、子どもはそこから何かを吸収して、頭がよくなるように思いがちなのである。

しかしながら、テレビでは子どもの欲求や行動、状態にかかわりなく、一方的に画面や音声の流れ出てくる。子どもが泣いていようが、寝ていようが、一切関係なしである。子どもがある画面を見て、あるモノをとろうとしても、あくまで映像であるため、それにふれることはできない。また、テレビのまねをして話しても、それをもう一度そばで繰り返して言ってくれるわけでもないし、ほめてくれたり、間違いを訂正してくれるわけでもない。子どもが反応した時には、テレビはもう先のことを話している。このように、テレビはあくまでも向こうからこちらへという一方通行の話しかけであり、しかも、こちらの状態とは無関係なものなのである。

従って、テレビを見ることによって新しい知識を吸収し、さらに新しい言葉を覚えていけるようになるのは、完全に言葉を習得した3歳以上の子どもについてだけなのであって、それ以前の子どもの場合、たとえどんなにうまくテレビのまねをして、話したり踊ったりしたとしても、それは所詮、音声なら音声、動作なら動作と別々のものに過ぎない。

#### 4. テレビの過剰刺激(映像と音)がもたらす身体的影響

一般に、「感性」とは、「刺激に対する感受さ」(感受性)であり、「驚きの反応」であるが、この「刺激」を感受する(子どもの)五感そのものが、メディア技術の著しく発達した高度情報社会では、根本的に変容している。その最たるものは、高画質の映像で目を楽しませ、良質の音声で耳を激しく愛撫する、ハイビジョン型テレビ(マルチメディア)である。

しかし、高性能のテレビは、子どもが強くて激しい刺激に対して反応できるが、弱くて細やかな刺激に対して応えられない原因を生み出すことになる。言い換えれば、子どもはからだ全体を通じて小さなものや微かな変化を感受したり、それらに共感したり驚いたりする体験を失いつつある。そして、子どもが小さなものや微かな変化にからだや心が応えなくなることは、そうした体験を介して深められる自己自身をも見失うことになる。五感(感覚)が鈍くなれば、内なる五感としての感性の働きもまた鈍摩し衰退してしまう。

しかも、以上述べた、子どもの五感の衰退は、高度消費社会における商品経済の原理によってもたらされている。商品経済の原理(=交換原理)は、モノそれ自体の使用価値やその交換価値さえも超えて、モノの記号的価値(付加価値)によって突き動かされている。とにかくモノを多く売って利益を伸ばすために、視聴率を上げるために、モノそれ自体の存在価値(差異性)を高めるといった戦略がとられている。テレビは、大量に生産した商品(モノ)を大衆に大量消費させるための媒体である。その結果、コマーシャルによる強烈な刺激をもって消費者(子どもを含めて)の五感に訴えかけることになるのである。

ところで、テレビの音と光の影響について言及するとき、避けることのできない事件として昭和52(1977)年12月17日夕方6時51分過ぎに起こった「ポケモン・パニック」が想起される<sup>11)</sup>。「ポケモン・パニック」とは、ピカチュウがポケモンを奪った、悪役の「ロケット団」のロケット弾を破壊するために、光線を放った際に、強烈な光の点滅するシーンが約4秒間続き、それを見ていた小中学生たちが痙攣、引きつけ、卒倒・気絶などの体調異常を訴え、約700人が病院に担ぎ込まれたという、わが国のテレビ・メディア史上、未曾有の事件である。これは、光感受性発作の典型的な症状であり、大脳のメカニズムの異常や失調によって生じるものである。そのため、病院に担ぎ込まれた子どもたちには、部屋を暗くしてテレビを見ていた者が多かったと言われている。

この事件ほどでないにしても、私たち大人ならば誰し

も、子どもたちが身動きもせず、夢中になってテレビを見入っている現場に立ち会ったことがある。そのときの様子は、子どもたちが何かに集中しているというよりも、腑抜けの状態、もしくは魂を抜かれた状態と表現するのが的確であろう。というのも、子どもたちは光や音が瞬間的にかつ大量に頭の中に押し寄せて来て、それを全部受けつけることができないとき、彼らは自然と頭の中にバリアを築くことにより、感覚を遮断すると同時に、思考停止状態となってしまうからである。そのとき、彼らは催眠術でもかけられたのと同じ状態で、周りのことを何ら感知し得なくなる。家族の人たちから呼びかけられても返事をしないのは、子どもたちがテレビを一生懸命に見ているからではなく、頭の中にバリアを築いて何も受けつけない状態にあるからにほかならない。

このように、テレビやビデオを視聴する人（特に、子ども）は、それに目や耳（諸感覚）と思考を奪われ続けている。彼らは一方的で過剰な情報の洪水にさらされている状態にある。この場合、情報というより刺激と表現した方が適切である。というのも、乳幼児の段階では情報を情報として選別し、それを意味づけした上で頭脳に受け入れる能力は未発達だからである。従って、乳幼児のテレビづけ生活とは、映像と音という刺激によってときをやり過ごしているだけの状態に過ぎない。乳幼児にとってテレビとは、過剰刺激の発信媒体なのである。

さて、テレビが発する光または映像の子どもたちへの影響でまず思いつくのは、それを見過ぎることにより彼らの目が悪くなることである。それ以外にも乳幼児の場合、もっと深刻な問題がある。それはテレビ映像の影響に伴う斜視である<sup>1,2)</sup>。

一般に、大人になっても左右別々に目の動く状態を斜視という。子どもは初め、斜視であった。それが徐々に左右一緒に目が動くように発達してくる。実際に両眼一緒に動くようになるのは、2歳を過ぎてからである。ところで、両眼が一緒に動くようになる前にテレビを近くで見せておいたらどのようなのであろうか。近くで物を見ると、目の球は真ん中によってしまう。近くでテレビを見ているときの子どもの目を観察すると、目と目が真ん中に寄っているはずである。

しかし、普通、テレビを見るのを止めると、目はまた元の位置に戻るため何ら心配はない。ところが、0歳～1歳の子どもの場合、まだ目の動きが完成されていないので、テレビを近くで見続けていると、どうしても両眼一緒に動くようにならない。結局、両眼を一緒に動かすという発達が遅れて、斜視になってしまう。斜視も強度になると、視力に影響が出てくる。

次に、音声と同様、テレビの画面も、子どもにとっては、大人と同じように見えるわけではない。実際の世界は、三次元であるが、テレビの画面は二次元である。この、二次元である平面に描かれたものを、三次元の、遠近感のあるものとして見るができるようになるのは、3～6歳にならないと困難である。従って、早期からのテレビ視聴は、子どもの視覚を混乱させるという弊害をもたらすのである。

## 5. 生活経験のシミュレーション化または疑似体験の影響

ところで、時々、幼児がテレビの主人公のまねをして高所から飛び降り、大怪我をすることがある。大人ならばテレビで主人公が危険なことをしても、それが普通できないことを理解し得るが、幼児の場合、そのことを理解することができない。幼児は、大人と比べて生活してきた年数が短いために、この類の体験量が圧倒的に少ない。それだけに、幼児の場合、映像と現実の区別がはっきりつかず、主人公と同じことができると思い、そのまねをしてみたり、あるいは、そこまで行かなくても、テレビの呼びかけに対して返事をしたり、テレビの中の人死ねと、本当に死んだと思ったりする。

しかし一方で、高度情報化社会では至るところで生活経験がシミュレーション化されている。ここで「生活経験のシミュレーション化」<sup>1,3)</sup>とは、生活のなかで創造・冒険・発見・友情などを実際には経験しないにもかかわらず、ある種の仕掛けを施して現実を経験したかのように錯覚させ、小さな満足感や達成感を味わわせることを意味する。元々、「シミュレーション」とは、航空機パイロット訓練の文脈で使用されたもので、「模擬的な経験」のことである。

しかし、実生活による経験学習が稀薄な子どもたちの発達にとって生活経験のシミュレーション化は、彼らにとって「模擬的」というよりも「擬似的」なものになってしまう。というのも、「シミュレーション化」とは生活経験が豊かな大人にとって必要なものであっても、子どもにとっては経験するプロセスを省略するだけの疑似経験に過ぎないからである。

## 6. テレビやビデオ視聴に伴う対人関係および

### コミュニケーションの発達不全

#### 対人関係の基礎としての母子関係の未形成

#### (1)共同注視としての二者間「内」交流・二者間「外」交流

テレビが子どもの発達に対して与える影響の中で最も

深刻なものが、これから述べる影響である。その影響とは、単なる負（マイナス）の効果だけにとどまらず、子どもの発達に対してプラスの効果をもたらすものをも消去させてしまうほどのものである。それは負の二乗の効果に匹敵する。



図3 浮世絵の母子像（周延「幼稚苑」）  
における共同注視  
〔＝二者間内交流と二者間外交流〕

ところで、浮世絵の母子像（図3<sup>14）</sup>）に見られるように、わが国の伝統文化の1つに母子間の「共同注視（joint attention）」<sup>15）</sup>がある。共同注視とは、母子という二者間「内」交流と二者間「外」交流の二重性<sup>16）</sup>のことである。つまり、二者間「内」交流とは、「母親・幼児」の身体的交流、非言語的交流、情緒的交流であり、二者間「外」交流とは、同一の対象の共有と言語的交流を意味する。平たく言うと、図3に示されるように、それは、母親がわが子を抱きかかえることでわが子と身体的、情緒的交流を行いながら、同時に、母親が（両者のやや前方にある）対象を指し示し注視しながら、「コイ」と命名することにより、わが子に注視させ、言語的交流を行うことを指す。いわば、母親主導で行う、情緒的交流を伴った「ことばの教育」である。この教育法は、浮世絵に数多く描かれているように（これ以外には、松園作「夏の宵」など多々存在する）、わが国の伝統的な家庭教育の方法であったと推測される（後述するように、その現代版が絵本の読み聞かせである）。

以上、浮世絵に示されるように、乳幼児の発達にとって母親（親）との、言葉によるコミュニケーションは欠かすことのできないものである。しかも、最新の人間科学の知見が提示しているように<sup>17）</sup>、コミュニケーション能力の土台は、人間的な接触、特に母親による語りかけやスキンシップ、母親と一対一で遊ぶ遊びなどによってしか培われない。ところが、子どもが友達と遊ばない、

言葉で主張することができない、社会性が乏しいなどと感じた場合、親（母親）はしばしば、社会性を培う訓練が必要であると考えてしまう。そのため、子どもの社会性を形成させるためには、集団の中に入れ、集団に慣れさせ、集団からの刺激を受けさせることが社会性を培う早道だと考えがちである。しかし、母親との間で培ったコミュニケーション能力の土台（基本的信頼）がしっかりしていない子どもは、コミュニケーションのノウハウが身につけていないために、集団にいる自分に戸惑い、集団を恐れ、逆に尻込みして内面に引きこもるようになってしまうのである。

このように、コミュニケーション能力の土台は、母親（親）とのスキンシップによって培われる。見方を換えれば、非行や問題行動などは、コミュニケーション能力の不足が根底にあって表面化する問題行動である。幼い頃に十分なスキンシップを体験しなかった子どもは、思春期を迎えた頃、感覚的行動に走りやすいと言われている<sup>18）</sup>。その理由は、スキンシップを十分受けなかったことで感覚への固執が残り、それを満たそうと感覚的行動へと短絡化するためである。

## (2) テレビ視聴の有無と母子間の会話

見方を換えれば、コミュニケーションとはレスポンス（反応）である。つまり、ある働きかけに対してまた別の反応が返ってくることである。具体的に言うと、レスポンスとは、泣いたら誰かが来てくれる、笑ったら、誰かが笑ってくれる、指さしをしたら誰かがその指示物を代わりに取ってくれるということである。そのとき、乳児は言葉や身体表現には意味があるのだと理解していく。ところが、テレビやビデオはレスポンスすることはない。働きかけに対する反応などは存在しない。つまり、テレビやビデオは映像や音がいかにも多彩で豊かであっても、レスポンスがないという意味においては無表情きわまるものでしかないのである。

ちなみに乳幼児期に十分豊かで濃密な母子間コミュニケーションを経験した子どもは、幼児期後半以降に、テレビやビデオなどから実に多くの言葉を習得し得る。しかし同時に、テレビやビデオだけでは満足しない旺盛なコミュニケーション能力をも獲得している。従って、こうした子どもは、テレビやビデオだけに向かいあっている日常に満足することができない、それゆえ、本物のコミュニケーションを求めて、親や友達と遊びたがる傾向がある。そして、外に出て、心身のすべてを駆使する遊びにも熱中することになる。

ところで、テレビが母子関係に与える影響を実証した



ものとして、テレビ視聴の有無と母子間の会話に関する実験が挙げられる<sup>19)</sup>。つまりそれは、母親が赤ちゃん(1歳児)に対して話しかけた言葉の数(45分)を「テレビを付いているとき」と「付いていないとき」とで比較するという実験である(この実験では、「わっ!きれいな。」ならば2語とカウントする)。

この実験の結果は、表2のようになる。表2からわかるように、テレビがついているときと付いていないときでは、顕著な相違が見られる。特に、ケース2の場合、テレビがついていないとき、1分間あたり、平均6.0語の会話があるのに対して、テレビがついているとき、1分間あたり、平均0.9語の会話に減少している。それはまったく会話の欠如した状態に過ぎない。ケース3でテレビがついているとき、1分間あたり、平均0.2語だというのは、論外にほかならない(それは、沈黙・寡黙の状態を意味する)。

表2 テレビが付いているときと付いていないときにおける母子間(3ケース)の会話の回数

	ケース1	ケース2	ケース3
付いていないとき	8.9	6.0	3.9
付いているとき	4.8 ↓	0.9 ↓	0.2 ↓

また、45分中、41分一言もしゃべらない母親がいたという。つまり、テレビがついている時間は、明らかに母親から赤ちゃんへの働きかけが減少してしまう。もし1日中テレビがついているならば、言葉の獲得に何らかのマイナスの影響が出るのが考えられる。このことから、テレビの視聴時間と母子コミュニケーションは、反比例することがわかる。

以上の実験結果は、次のような具体的な生活場面においてより明確なものとなる。つまりそれは、テレビの家庭への侵入に伴い、家族の会話が減少するという事態である。テレビが家庭の中に入ってくることで、各家庭の雰囲気や慣習は大きく変容した。とりわけ、変容したのは、家庭内での会話である。食事時中もテレビを見ているという家庭は少なくないと言われている。

また、朝食時はテレビ画面に時刻が出るため、時計代わりに画面をにらみながら食事をすることが多い。昼食時はニュースを聞きながらということで、1時間ぐらいつける家庭がある。夕食時はまだ子ども向けのマンガなどをやっている時間帯に当たるので、これも見ながら食べるといった具合である。

テレビを消してあれば、子どもの方へも注意が向くし、

話しかけ可能であるが 前述した結果からもわかるように、テレビがついていれば、親子ともどもテレビの方に注意が向いているために、子どもも落ち着いて食べられなかったり、一刻も早くご飯を済ませて、テレビを見ようという構えになってしまったりしがちになる。

ところで、テレビは私たちにとって一方通行的なメディアであるとともに、それがなぜ子ども(特に、乳幼児)

正確には、母子関係 に対して悪影響をもたらすのかについて実証したものがある。その実験方法とは次の通りである<sup>20)</sup>。生後3、4ヶ月位の新生児と母親との社会的相互作用を、直接的にはではなく、ビデオカメラを使って行わせる。つまり、赤ん坊と母親を各々別の部屋に入れて、各々の部屋にビデオカメラとディスプレイを置いて、母親の部屋には赤ん坊の映像が、赤ん坊の部屋には母親の映像が映るようにする。

その上で、最初、リアルタイム(双方向)の映像を両者に流し、次に、録画(一方向)の映像を両者に流し、2つの実験結果を比較した。この実験の秀逸なところは、両者が体でふれあうことを統制した上で、純粋に視覚面のみを問題にしたことである。つまり、視覚面で言うと、リアルタイムの場合が、両者がほぼ同時にまなざしを交換しあうケースとなるのに対して、録画の場合は、両者が時差的にまなざしを交換しあうケースとなる。後者の場合、前者と異なり、タイムラグが発生するわけである。

この実験の結果は、次の通りであった。すなわち、リアルタイムの映像の場合(=日常の場面)、母親が微笑むと、乳児も微笑み、満足したのに対して、録画の映像の場合(=テレビ・ビデオの場面と同じ設定の場合)、母親の微笑を録画に撮ってその映像を乳児に見せても、乳児は微笑まず、不安げで目を反らしたり表情を変えたりしたのである。こうした結果の相違は、どのように考えればよいのであろうか。

### (3)W.コンドンのコミュニケーション論

以上の実験結果を考察する上で、W.コンドンの「相互作用の同期性(反応の呼応性)」が有力な手がかりとなる<sup>21)</sup>。コンドンは、コミュニケーションの現場を超低速で撮影したフィルムを観察し、話し手の身体各部の微細な動きが音声と完全に同期していることを発見した。これは常識的にも予測できることである。さらに、コンドンは、聞き手の行動をコマ毎の徹底的なマイクロ分析にかけることによって、聞き手は話し手の発話の音素、音節、あるいは語に同期して動くという、予期しない観察結果を得た。聞き手の行動がマイクロ水準で徹底的に分析されることはそれまで一度もなかったもので、この現象

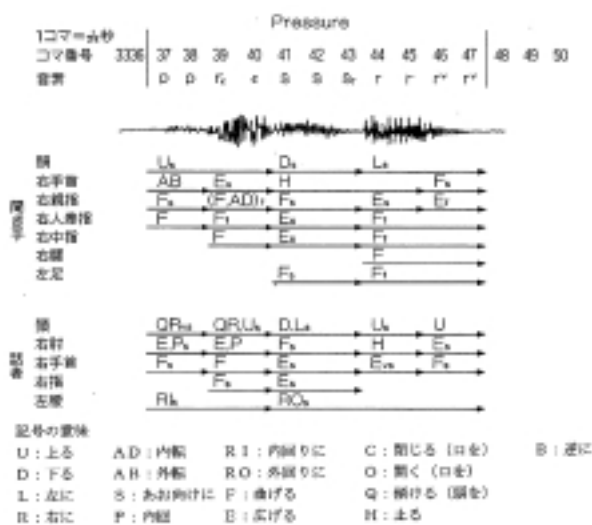


図4 相互作用の同期性：話し手の音楽、話し手と聞き手の動き

は知られていなかったのである。この現象が「相互作用の同期性」にはかならない。図4<sup>22)</sup>は相互作用の同期性の特徴をはっきりと例示している。

図4に示されるように、大人の相互作用の他のフィルムから得られた 'pressure' という語は、声になる部分と声にならない部分との対照的な系列をなしている。この発話のオシログラフ表示は、この音声パターンがどのように視覚的に示されるかを例示する目的でここに掲げられている。この語の直前に発せられた the ' (図4には示されていない) の音声部の /a/ 音が終わると、それに引き続いて非音声部の /p/ 音が現われ、2コマ (2/24秒) 続く。これに続いて音声部の /re/ が2コマ続き、それに引き続いて非音声部の /s/ 音が3コマ続く。最後に音声部の /r/ が現われ、4コマ続く。

この語全体は、11コマ、つまり0.5秒弱の長さである。聞き手の身体の動きは、話し手の発話の単位長さに対応した、あるいはそれに合わせた体制化された動きの束を示す。これは特に、'pressure' の /sss/ と共に生起する聞き手の動きの束にはっきり認められる。

最初、右手の第1、第2指は曲がっていた。それが、この /sss/ が持続する3コマのあいだ、向きを変えて僅かに伸ばされ、この部分が終わるとまた曲げられたのである。さらに、相互作用の同期性という現象は、新生児 (生後わずか20分の新生児) においてさえ起こるということが発見された<sup>23)</sup>。大人が乳児に対して "Come over and see who's over here." と言うと、どの乳児も同じような正確な応答性を示すことが確認されたのである。ただ、自閉症など一部のコミュニケーション障害を例外として、同期のリズムが崩れることはきわめて稀で

あったという。

以上、コンドンの実験から実証されるように、聞き手の身体の動きを調べると、話し手の動きと、まるで鏡に向かい合うかのように (合わせ鏡のように) 同期していることが明らかになったのである。「相互作用の同期性」現象は、まさに私たちの身体が話し相手の身体の動きをなぞることによってその話を身体レベルから理解しているのだということを示している。しかも、同期は、相手の動きを見てから自分の身体を意図的に操作するのではなく、相互的コミュニケーション活動の流れに導かれる (乗る) 形で、無意識的に身体同士が呼応し合うことによって生じるのである。ここで、身体 (の部分) を同調させて動かしていることを特に「エントレインメント (entrainment)」<sup>24)</sup> と呼ぶ。こうした呼応がうまく行かず、身体の「なぞり」が中断されるとき、私たちは多分会話に「のれない」ことを感じるであろう。一方がのれないと、普通、相手ものれなくなる。というのも、会話は2人で1つの場を形成し、1つの行為を遂行する相互主観的な活動だからである。

コミュニケーションの場が成立しているとき、しばしばそこは外界から切り離され、「自分たちだけの世界」が成立しているように感じられる。私たちは確かに何かを共有しているのを感じ、話題についての理解だけでなく、同じ気分を分かち合う。笑いは確実に伝染する。というのも、それは、私たちが心身の全体で互いに同期しているからである。私たちは相手の言葉を「頭でわかる」だけでなく、「身体でも理解している」のである。この、身体的レベルでの理解、すなわち「腑に落ちる」、「身に沁みてわかる」を支えているのは、全身の「なぞり」活動なのである。コンドンの知見以外に、聞き手が相手の話に共感しているとき、自らのからだの一部を触るといふ知見があるが、それは「自己接触行動」<sup>25)</sup> と呼ばれている。

こうして、話し手と聞き手が同じ気分を分かち合うことをはじめ、相手の身体を相互的になぞりあう活動のことを、コンドンは「コミュニケーション・ダンス」<sup>26)</sup> と呼んだ。従って、対話 (コミュニケーション) とは、相手の動きに呼応しつつ、個人の動きを超えたりズム (雰囲気) にのり、さらにこの「のり」を進展するべく、新たなステップを相手に呼びかけていく運動であると言える。意識の上で明滅する言葉の意味とは、身体の意味生成ダンスの、水面上に現れた冰山の一部に過ぎない。その意味で対話 (コミュニケーション) は、情報伝達というよりも他者との相互理解が目的となる。比喩的なイメージで言えば、2つの頭をコードで結ぶことではなく、

2つの身体が1つのダンスを踊ることである。そのためには、2人はお互いに相手をなぞりつつ、次第に呼吸を合わせていき、ついには2つの身体が、1つの踊る身体の2つの部分に感じられるようになるまで共振する必要がある。

このように、対話（コミュニケーション）とは、結局、心身の全体的な活動である。言葉は、その活動の、表面に突出した部分に過ぎない。繰り返すと、コミュニケーションが成功し、相互理解が実現するためには、言葉のやりとりの水面下でお互いに相手の身体をなぞり、その態勢を（そして、意味を）身体で理解しなければならないのである。

以上述べた、コンドンの心理学理論に基づくと、前述した実験の結果は、次のように説明することができる。視覚面では、乳児がごく普通に母親とかかわる場面に近い「リアルタイム」の映像の場合、母親と乳児が「相互作用の同期性」状態にあるがゆえに、両者は同じ気分を分かち合うことが可能となる。母親が微笑むのに同期して、乳児もまた微笑むということは、そのことを端的に物語っている。それに対して、乳児がテレビを見ている場面に近い「録画」の映像の場合、乳児は母親が微笑むのを見ても、微笑むことがなく不安げな様相を呈するのは、両者がシンクロできないためである。それどころか、乳児はテレビより、一方通行の映像（テレビに登場する母親）を見せられるため、その映像と同期することができず、不快感を示すことになる。このときの乳児の気分を代弁すれば、「不快だ」となる。乳児（子ども）がこうした一方通行の映像を常時見続けることは、その子どもに多大な不安感やストレスを与えることになり兼ねないのである。以上のことから、この実験は、一方通行のメディアとしてのテレビが子どものコミュニケーションを疎外するものであることを示していると考えられる。

## 7. テレビによる表情読解力の欠如

### アニメの人間理解

ところで、最近の子ども（小学生）は、対人関係においてアニメのようにきちんと作られた表情や動作だけしか読み取ることができないと言われている。小川信夫はそうした現象を「アニメの人間理解」<sup>27)</sup>と呼ぶ。アニメを長時間視聴する、今の子どもたちは、アニメに描かれた、はっきりとした表情やデフォルメされた表情、すなわち「かわいい」口唇的には「かわゆい」という価値観をもとに、誇張された表情しか認知（理解）することができない。しかも、そのわかりやすい表情で

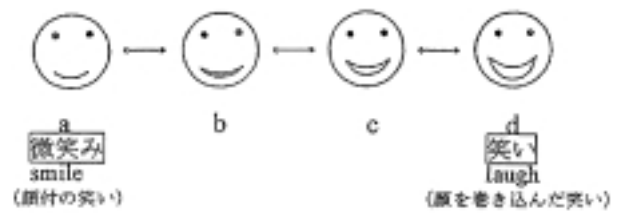


図5 アナログとしての笑い

満足してしまうがゆえに、彼らは、曖昧で中間の表情の変化や、そうした表情に表される心の動き（機微）などを認知（理解）することが著しく困難なのである。

以上述べたことを、図5<sup>28)</sup>で説明したい。「笑い」とはアナログ的なものである。そのことは、図5に示されるように、微笑み（smile）と呼ばれる顔付きの笑い（a）から始まり、b c dというように、徐々に大きな笑いへと連続的に変容させ得ることからわかる。図5の最後の、笑いもしくは大笑い（laugh）と呼ばれる顔を巻き込んだ笑い（d）は、福笑いのように、あたかも顔の秩序を混沌に落とすかのような大きな笑いである（実際には、これよりも大きな笑いを図示することも可能である）。図5のa～dのうち、今の子どもたちすべてが容易に理解し得るのは、dのlaughだけであると推測される。恐らく、半数の子どもたちが認知可能なのは、cであり、ごく一部の子どもたちだけが認知可能なのは、bであり、さらに、aになると、ほとんどの子どもたちが認知し得ないのではなかろうか（これはあくまで、前述した「アニメの人間理解」の実態をわかりやすく説明するために図で説明したものである）。

ところで、ひとのところが読めない子どもたちは、内向的で表情を顔にも出せず、自分を明確に表現することができない。要は何を考えているのかまったくわからない。「ネクラ」の子どもをスケープゴートにしてしまう可能性がある。しかも、最悪なことに、いじめられた子どもはますます自分の殻に閉じこもり、表情を失っていくとともに、一方、いじめる方（傍観者を含めて）はいじめられた子どもがどのように感じているかについても無関心であるため、いじめはどんどんエスカレートしていくことになってしまう。要するに、「いじめられる」関係は、悪循環に陥り、歯止めが効かない。また、他の子どもたちは子どもたちで、自分自身がいじめの被害者（ターゲット）にならないために、自己保身のために、あくまで傍観者として目立った行為をせず、知らないふりをしたり、あるいは「ネアカぶりっ子」「明るく」「ハキハキ」を演技し続けたりしなければならない。

このように、テレビからの影響は、子どもたちのアニメの人間理解を生み出す一原因になることにより、深刻ないじめ問題にまで影を落としているのではなからうか。

## 8. 「感情教育」としてのテレビ

前述した「アニメの人間理解」のように、子どもたちはテレビを通してアニメを長時間視聴するために、はっきりとした表情およびそれに対応する心の状態（「大変悲しい」とか「大変うれしい」とか、笑いの中では「顔を巻き込んだ笑い」とか）を理解することしかできなくなりつつある。こうした傾向と符合するかのようになり、テレビで流される番組もまた、登場人物の表情を画面一杯にアップにしたり、大げさにしたりしている。要するに、喜怒哀楽が激しくなっている。テレビ番組は、アニメ、ドラマ、バラエティ、ニュース報道等々といったものが挙げられるが、これらすべてが各々の流儀で、感情を激しく表現するものになっている。例えば、ドラマでは登場人物が怒ったり、泣いたり、笑ったりするシーンが短いスパンで多用されている。また、バラエティでは恋人同士が互いの秘密を告白することで感情を爆発させたり、ときには喧嘩別れしたりすることも少なくない。あるいは逆に、本物の恋愛や愛の告白をテレビ番組の中で行うものさえある。さらには、孤島でサバイバルゲームを実演する中で参加者（素人）が自らのプライバシーを露出したり、他の参加者への憎悪を剥き出しにしたり、ときには他の参加者を陥れたりする。大金を獲得する人気クイズ番組では司会者と出演者が心理戦を繰り広げる。特に、大金を手に入れたとき、出演者はテレビに出演していることも忘れて狂喜乱舞する。また、お笑い番組では、視聴者への配慮を無視して、お笑いタレントがプライベートなことをさらけ出したり、「本気になって」怒ったり喜んだりする。しかも、そのコメントがテロップで画面に大きく映し出され、強調される。テレビ画面には「マジギレ」とか「号泣」といった感情表現が踊っている。

このように、現在のテレビ画面は、激しい喜怒哀楽で埋め尽くされている。従来（本来）、テレビとは、そのフレームの中で出演者が意図的に演じる（役扮演技する）ところであった。テレビ番組は、適度な自己コントロールや感情コントロールによって構成されていたがゆえに、視聴者はそれを安心して、しかも適度の距離を置いて享受することができた。ところが、現在のテレビは、視聴率を獲得するために、視聴者への刺激の強さだけを求めるものになり果てつつある。現在のテレビは、好む

好まざるにかかわらず、出演者の喜怒哀楽を直視するものになっている。しかも、制作者は視聴者が飽きがないようにと、刺激的な場面を多用する。その場面の中で用いられるのが、出演者自身の感情（素の感情）なのである。とりわけ、出演者がタレントではなく、素人であるとき、その感情は意図された感情としてでなく、“本物の”感情として露出されてしまうことが少くない。こうした、“本物の”感情は、視聴者にとって生々しいものと映る。

現在、テレビ画面の中で起こっているのは、まさに「現実」なのであって、虚構でも演技でもない。日常世界で起こっていることが、純粋な形式においてテレビ画面の中で起こっているのである。その意味でテレビ画面は、日常世界を増幅させたものだと言える。

ところで、テレビ画面における感情の露出（表出）とは、テレビの個人化を意味する。今までは到底人前に出すことのできなかつたプライベートな部分や秘密が、平然と表出されているのである。

ところが、テレビとは元来、公共の電波であった。ここでは私的でプライベートな事柄、特に感情は発露され得なかつた（たとえ表出されても、それは公共のフレームで極力、制限されていた）。ところが、現在では公共の電波を借りて個人的な感情が視聴者によって観賞されている。公共性の解体の最前線こそ、テレビにほかならない。現在、テレビは社会そのものを映し出す装置ではなく、私的な個人を映し出すそれに過ぎない。それゆえ、テレビは子どもたちにとって公共性を形成する上での教育装置とはなり得ない。むしろ、テレビこそ、他者に向けて“本物の自分”や“本物の感情（心）”を表出・表現することを良しとする“新しい感情教育”の媒体なのである。

そして、こうした“新種の感情教育”のあり方は、現在のサイコパブル社会を支持するものとなっていると考えられる。例えば、テレビでタレントや素人が“本物の感情”をさらけ出す場面を見た子どもたちが、自らの心のうちを直に他者（特に、教師）に向けて表現することがあたかも正しいことであるかのように判断し、実行してしまうことは、この“感情教育”の成果だと考えられる。その子どもにとってその行為は、自らの欲望（“本物の感情”）を他者が「受けとめてくれるか／くれないか」ということだけを目的としたものに過ぎない。公共の中で形成される人間関係は、自らの欲望（“本物の感情”）を抑制し、自らの役割を無意識的に演じあうところにあると考えられる。その意味で、本来（従来）、公共の電波と言われたテレビが公共性を度外視して、“本

物の感情”をさらけ出す場所になっていることについて再考すべきであると考えられる。

### 9. テレビによる「イメージ - 言葉」発達の阻害

一般に、言葉は周りの人たちとの相互交流と話しかけの中で育つものである。テレビが話す日本語（特に、コマーシャル）は、同じ日本語ではあっても、子どもの現在の状態や行動とは無関係の日本語に過ぎない。このように、すべての人に向けられる、裏を返せば、誰に対しても向けられたものではない、非人称の日本語を多く聞かされても、言葉を覚える過程にある乳幼児の言葉は育たないと考えられる。にもかかわらず、大人はそれが、意味のない日本語であると認識していないのである。

当然のことながら、テレビは、子どもの年齢に合わせ話してはくれない。しかも、大人が子どもに話しかけるときには、必ずいま目の前にあるモノについて話している。子どもは、自分の目でそれを見て、手でふれて確認することができる。言葉を覚えていく過程では、こうした自分の体験と同時に、それを現す音声が入ってくるということが重要である。

言葉遅れの子どもの場合、コマーシャルしかしゃべれないという子どもが少なくない。そうした子どもたちの多くが、言語の発達に異常があり、オウム返しや独り言など普通の子どもには見られない変なしゃべり方をしたり、耳は聞こえていると思われるのに、3歳、4歳になっても一言も話したりしない子どもが存在する。このように、コマーシャルは口をついて出ても、簡単な日常語でさえ理解できない子どもが存在する。コマーシャルが歪んだ感性をつくってしまうということで、諸外国ではコマーシャルを厳しく規制している<sup>29)</sup>。例えば、イギリスでは玩具やお菓子のCMにテレビ番組の主人公を使うことができない。ギリシャでは玩具のCMは全面禁止されている。オーストラリアでは就学前の子ども番組の中でのCMは禁止されている。そしてテレビ王国であるアメリカでさえも、子ども番組の主人公（キャラクター）をCMに使うことは禁止されている。このように、諸外国では、コマーシャルが子どもに及ぼす影響を十分配慮して、CMのルール作りを実施している。その点だけから見ると、わが国の場合、まったく反対の状況にある。むしろわが国では、子ども番組の主人公やキャラクターは、テレビだけでなく、あらゆる商品で多用されている。商品（例えば、ふりかけ、風邪薬、自転車等々）を購入する際に、小さな子どもやその親は、その商品の効用とは無関係に、そうした主人公やキャラクターの映像があるからという理由で選択することが少なくない。わ

が国の子ども市場は、人気子ども番組（アニメ）とスポンサー（大手の製菓会社）が連携することにより開発されてきたという経緯があり、従来、コマーシャルと子ども番組とはタイアップするものと考えられてきた<sup>30)</sup>。しかし、コマーシャルが子どもにもたらす影響を考えると、諸外国が行っているように、CMのルール作りをしていかなければならないと考えられる。

そして、同時に考えなければならないのは、コマーシャルに典型化されるように無人称の日本語がテレビを通じて流されることによって、今の子どもたちの言葉使いにほとんど地域差がなくなってきたことである。現在では、地方の子どもであっても、都会で話すような日本語あるいは標準語に近い日本語を話すことが少なくない。言葉が生活に密着したものであることを考えると、すべての子どもたちが同じ発音・イントネーションや同じ言葉使いをすることは、異様なことである。正確には、今の子どもたちは地方や都市に関係なく、いかなる生活のコンテクストにも根ざさない どこにもあるが、どこにもない 無人称の日本語を話している。これがテレビが流すコマーシャルに基因するとすれば、コマーシャルのあり方を見直すことが必要である。

また、言葉が遅れて出てきた子どもは、大人とは会話することが可能である。というのも、大人は、十分子どものことを配慮しながら、応答するからである。ところが、同世代の子どもとの会話は著しく困難である。というのも、周りにうまく反応することができないために、一緒に遊ぶことができないからである。

ところで、普通つけているテレビの音は、人間の話し声の大きさとそう変わらないために、テレビが常時ついている部屋で育った子どもは、人間の声に対して鈍感になってしまう。そうすると、周囲からせっかくその子どもの動作や状態に合った話しかけをしたとしても、それが頭の中で結びついて言葉にはなっていくことができない。

乳幼児が言葉を覚えるのに必要なのは、直接的な話しかけである。テレビやラジオのように、一方的に音が流れてくるものは、言葉を覚えるに際して役に立たない。しかも、テレビは、朝から晩まで、絶え間なく音と映像を流している。テレビは一方的に音と映像を流すだけであるから、言葉の習得には役に立たないのである。

テレビは、常に私たち（子ども）の視覚を占領している。このとき、耳から言葉を聞きながら、目で画面を見ていることから、自分の頭の中にイメージを作る必要はない。J-P.サルトルを持ち出すまでもなく、何かを知覚している（＝目で見ている）ときは、頭の中で何もイメ

ージすることができない。ということは、私たちがテレビを見ているとき、画面に目を奪われることになるため、私たちはテレビから送られてくる音声や文字から何もイメージすることができないということになる。従って、テレビばかりを見ていると、音声を聞いたり文字を見たりしたとき、その音声や文字が喚起するイメージが頭の中に浮かんでこなくなる。音声を聞いたり文字を見たりしても、それらは安易に目の前の映像と結びつき、自分の頭の中でイメージが育つことはない。つまり、音声や文字をイメージに置き換える力が育たないのである。テレビの視聴を通じて、目で映像を見て、耳で音声を聞いたり文字を見たりすることが習慣化されてしまうと、それらを聞いたり見たりして頭の中にイメージを浮かべることは、困難になってくる。頭の中にイメージが育っていないがゆえに、それを言葉にして表現していく力が生まれるはずがないのである。

これとは対照的に、体験と言葉を同時に繰り返すと、今度は言葉を聞いただけで、その言葉のイメージが頭の中に浮かぶようになる。言葉の働きとしては、イメージが頭の中に浮かぶというのが重要である。言葉のイメージを使うことでイメージのやりとりを行うことによって、私たち(子ども)はいま、目の前にあることだけでなく、遠くの人たちとも情報を交換でき、過去の人々の文化遺産を引き継いで、将来に向かって計画を立てるようになるのである。

#### 10. テレビによる様々な能力の発達不全

前述したように、今や、テレビは個々人のプライベートな喜怒哀楽(感情)が露出してくる「非公共的＝私的な」空間であり、子どもを含めて視聴者は、そうした感情がさらけ出される場面をより多く求めて、ザッピング(＝リモコンを使ってチャンネルを忙しく変えること)を行って行く。むしろある特定のテレビ番組やチャンネルに留まっている方が奇異に感じられるほど、視聴者はザッピングによってテレビ番組を回遊して行く。やがて、そうした行為は、常態となり、視聴者は激しい感情の発露 正確には、過剰な刺激 に対して無感覚になってしまう。

そのことは、裏を返すと、テレビばかりを見ていると、物事をじっくりと考えることができなくなってしまうということになる。つまり、過剰な刺激によって思考停止状態に陥ってしまうことになる。

さらに、テレビが常時ついていて、ぼんやりしている時間というもの、いつの間になくなってしまふ。ぼんやりしているときとは、それまでに頭の中に蓄積さ

れた知識や経験が自由に解き放たれて、頭の中を駆けめぐっている。そして、意識的に考えていたときとは別の結びつきをとって突然頭の中に現れる。テレビが普及してから、このぼんやりしている時間が相対的に減ってきてしまった。さらに、テレビの視聴にともなう、意欲の低下も起こっている。この場合、ただ、ただらとテレビを見続けるという消極的な態度が身についていくだけである。

物事を自分で考えるときには、現象を言葉に置き換え、言葉によって考えていくが、テレビを見ているときには、この置き換え不可能となる。

さらに、テレビというのは、あくまで受け身のモノであるがゆえに、子どもが様々な想像を働かせて遊ぶ(「見立て」遊び)という部分がまったくない。本を読む楽しさや、おもちゃで遊ぶ楽しさを体得した子どもたちは、イマジネーションをもっているため、テレビがなくても少しも退屈しないはずである。

#### 11. テレビによる学校での私語の増加現象

ところで、テレビは思いもかけないところで子どもの発達に影響を及ぼしている。その事例の1つが、授業中の私語である。それはテレビの普及とともに増えてきた。今では、高校や大学だけでなく、幼稚園や小学校でさえ顕著である。

学校での私語は、テレビの普及とともに育った子どもが大きくなっていった軌跡と時を同じくしている。普通の会話では、相手が話しているときは、相手の方を見つめて、こちらは黙って話を聞く。もし、勝手に聞き手が話し出したら、話している人は話を止めるか、もっとこちらの話を聞きなさいと注意を促すかするであろう。ところが、テレビの場合、自分がどれほど勝手に私語しても怒ることはない。テレビは、話の途中で勝手に話しても、あるいはチャンネルを切り替えても文句を言わない。こうして、テレビによる生活習慣が身につくことにより、人の話を聞きながら勝手なことを平気のできる状態に慣れてしまうと、教室でもそれが普通になってしまうのである。

#### 12. マルチメディアとしてのテレビと感情発達の困難性

J・ハーリーは、コンピュータが子どもたちに与える影響を指摘する中で、感情リテラシーは自分1人では学習できず、他の子どもや大人との交流を通して学んでいくしかないということを指摘している<sup>31)</sup>。自分が想定した事態をはるかに超える展開があり、それに対処する方法を模索する。そのときに働くものが感情である。自分

からの働きかけに対して意外なレスポンスがあって、それに対処しようとするときにこそ、コミュニケーションが深まっていくことになる。

A.R.ダマジオが述べるように<sup>3,2)</sup>、感情は複雑な状況、すなわち選択肢の多い状況の中で意思決定判断を下すという働きを有する。これに対して、知性は選択肢や可能性を増やすだけである。例えば、約束の時刻に遅れそうな場合、タクシーで行くか、電車で行くかといった選択肢を考えるのが知性の働きであるのに対して、感情は、知性が作り出したそうした選択肢の中から最善のものを選択し、行動に移す働きを有するのである。たとえ道德の授業を通じて子どもたちが道德的行動の選択肢をより多く学習したとしても、学級でいじめがなくなる最大の理由は、そのことから説明できる。つまりその理由とは、道德の授業では道德的行動に関する知識（選択肢）を習得し得ても、その中から最善の知識を選択し、行動に移す際に必要な感情を習得することのできないことにある。普通、感情は、様々な対人関係を形成していく中からその都度醸成していくことしかできない類のものである。その意味で、テレビが感情を醸成し得るという可能性はまったくないのである。テレビやマルチメディアとしての高性能の電脳機械が子どもに対して構築できるのは、知性、それも脱文脈的で限られた知性だけなのである。繰り返すと、コンピュータやそれと同等のテレビには事態を超えた展開への対処、いわば意外性が欠如している。そうであるがゆえに、それらを使用している限り、感情が働く場面は存在し得ないし、感情を醸成し得る機会も存在し得ないのである。

さらに、コンピュータと人間との間には擬似的なコミュニケーションが演出される。しかし、演出である限り、意外性には限りがある。つまるところ、きわめてパターン化された作業の反復が連綿として続き、感情を動かす必要もなくなり、さらにはコミュニケーションの実感などを体験することができないまま、時間だけが過ぎゆく結果になってしまう。

前述したように、テレビやビデオは一方通行の情報である。ところが、コンピュータを相手にすると、単純に一方通行の情報にさらされるのではなく、擬似的または限定的でありながらレスポンスがある。その分、コミュニケーションしているという錯覚を抱いてしまうことになる。そのため、より深くはまりやすく、飽きにくく、従って深刻な弊害を招くことにもなり兼ねない。その意味で、コンピュータは双方向性機能をもつテレビと同等のものだと考えられる。見方を換えると、双方向性機能をもつ、マルチメディアとしてのテレビもまた、コンピ

ュータと同様の、子どもの発達問題を起こしかねないのである。

このように、テレビやビデオをはじめ、コンピュータやテレビゲーム、総じて電脳機械は、みな同じ問題点を持っている。人間同士のかかわりがもっとも必要とされる時期、こうしたメディアにさらされている子どもたちは、一方通行（擬似的な双方向性を含めて）の映像、音、光に無意識の消極的応答をしているだけである。総じて、電脳機械は、一方通行の刺激でパターン化された動きしかしないものに対しては、すべて注意を払い、子どもがはまっていないかどうか注意を払うべきである。

さらに、早期教育の典型として、乳幼児にフラッシュカード遊び（言葉、絵、漢字、アルファベット、英単語を書いたカードを見せて、学習させるもの）がある。こうした早期教育は、いかにも知的な能力の発達を促進するように言われながら、その実、単純な反復練習の連続でしかない。指示に対して一定の反応をすれば、「よくできた」と認められる。そこでなされているのは、コンピュータがもっとも得意とする単純なルーチンワーク（かつてのプログラム学習）である。それは、指示に対して一定の反応をする反復訓練を行うことだけである。指示に反応するだけの早期教育を強制され、一方通行の学習ビデオを与えられる一方で、力いっぱい外遊びのチャンスを奪われるというのが、今の子どもたちの現状である。

### 13. 活字文化からみえてくる電子文化の問題点

#### テレビと読書（絵本）の対照

一般に、読書は、読むという意志、読んでいる内容を思い描くという想像力、前後の脈絡をつなげていくという思考力など、静的ではありながらかなり幅広い能力を動員しながらの行為である。落ち着いた気分を保ち、集中力の持続ができなければ楽しむことのできないものが読書という能動的行為である。読書は、子どもにとって自分自身の意欲や興味を一定の意志を保ちながら何事かに向け続けられる状態と力の雛形である。

ところで、幼児にとって絵本は、人生最初の読書行為となる。確かに、見ているという点では、絵本の絵もテレビの画面も何ら変わりはないが、絵本は動くことはない。動かないということは、その絵を見つめている時間が長いということになる。つまり、聞き手である子どもは、お話を聞きながら、自分の頭にその場面を刻み込むことができる。もし、もっと見ていたかったらその場面で立ちどまることが可能である。お話の部分に比べると、絵本は1つの場面しかないのです、その絵に出てこない部

分は自分の頭の中で補っていくしかない。つまり、絵本はわずかな挿絵を手がかりにその絵に出てこないイメージを子どもが作り出すことによってイメージと言語を結びつけていく媒体なのである。その場合、どんな場面を補っていくかは、絵本を見ているその子ども、その子どもに任されている。しかも、絵本は子どもと一緒に本をもって子どもの表情を見ながら読んでやれるところが優れている。それは前述した、母子間の共同注視に該当する。最近、図書館や保健所で母親（親）と乳児に絵本を手渡し、母親が絵本で乳児に語りかけることを促進させることを目指す、ブックスタート運動が起こっている<sup>33)</sup>。

こうした絵本（本）という活字文化からみると、テレビは、次から次へと場面が現れるため、どうしてもそれに囚われてしまって、自分の頭の中にイメージを浮かべていくという作業ができなくなってしまう。これができていないと、学校に入ってから本を読んでいく場合に大変困難になると考えられる。

大きくなって本を読む場合、見ているのは確かに文字であるが、私たちはそれを頭の中で音声で置き換え、さらにこの音声をイメージに置き換えて文章の意味を理解している。それが円滑にできるようになるには、その前提として、音声をイメージに変換することが容易にできなくてはならない。テレビばかり見ているだけでは、その力が育つことはない。

また、テレビを見るときは、テレビに合わせて見ることができないが、本の場合、自分の頭のテンポで読むことができる。テレビが繰り返す機械的なテンポに合わせて見ることに馴れてしまうと、自分の頭で考えることができなくなってしまう可能性がある。

#### 14. テレビがもたらす「大人/子ども」関係の枠組みの変容

ところで、子どもたちに対するテレビの影響に関してどうしても言及しておくべきことがある。すなわちそれは、N.ポストマンがいみじくも指摘したように<sup>34)</sup>、テレビを中心とする映像文化（電子的な声の文化）が活字文化に取って替わることによって、従来、存在していた「大人/子ども」という関係の枠組、すなわちその区別が消滅したということである。その理由は次の通りである。第1には、テレビにはその方式を理解する教育は必要ない、第2には、テレビは精神にたいしても人間の行動に対しても複雑な要求をしない、第3には、テレビは視聴者を選ばない。最も重要なのは、テレビ映像を理解するのに特別な能力を必要としないということなのである。だからこそ、テレビは、これまでの「大人/子ども」という区別を消滅させることにつながる。

言い換えると、テレビの前では大人も子どももまったく対等な、情報の消費者であり、子どもは容易に大人の世界に触れることができる。ここで大人の世界とは、性、死、悪といった大人秘密、または大人社会の裏と表を意味する。その典型がニュース番組、あるいはニュース・ショーである。それらは、世の中で起こった悲惨な事故や事件、性的スキャンダルや異常な性愛、社会的不正などをテレビドラマとは異なり、露骨な形で（剥き出しで）子どもに伝えてしまう。テレビは子どもにとってまさに性、死、悪の公開の場所であると同時に、隠されるべき裏通りの文化（情報）を表通りの、公認の文化として価値伝達していく媒体なのである（テレビそのものは、すべての情報を表通りの文化として流通させる伝達形式にほかならない）。以上述べたことは、図6としてまとめることができる。

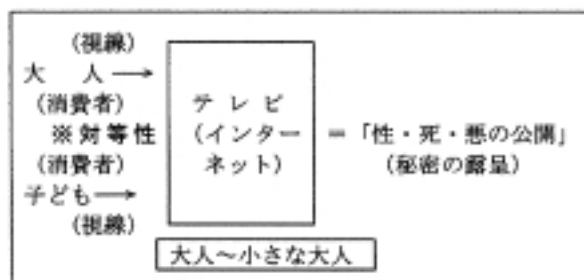


図6 テレビにおける「子ども」と「大人」の対等性

例えば、もし、テレビのニュースが新聞によって活字報道された場合、子ども（特に、幼児）は理解できるであろうか。一般に、5歳程度の子どもにとって活字報道されたニュースは理解できないと言われている。というのも、活字（読み書き算）は、「子ども期」に学校という空間で学習しなければ習得し得ない類の能力だからである。活字は、論証的、表現的、純理的なメディアなのである。見方を換えると、テレビはそれだけ、直感的、即時的、感情的なメディアだということである。だからこそ、ポストマンが指摘するように、特別な能力は不要なのである。テレビ、さらにインターネットは、情報を瞬時に消費する電子媒体であり、それを消費するのに、教育や知識の差は問題にならないのである。繰り返すと、60歳の初老の人であろうと、5歳の子どもであろうと、同じ時間に情報を消費することが可能なのである。

こうして、テレビを中心とするマスメディアは、「大人/子ども」という区別を超えてすべての消費者に対等な形で享受されている。もはや大人が子どもに対して、テレビ等を通して伝達される情報をほとんど規制することができない。むしろいまの子どもは、この手の情報を



入手することに長けていて、大人以上の力を発揮している。

以上、乳幼児を中心に据えつつ、子どもたちに対するテレビの影響、特にその発達問題について述べてきた。それでは次に、こうした子どもの発達問題（生活問題）に対する対策について述べていくことにしたい。

## ・ テレビ問題への対策と提言 結語に代えて

序論で述べたように、わが国よりも早く地上デジタル放送を開始したアメリカでは、子どもが少なくとも2歳になるまでは、テレビやビデオを一切見せてはならないということを唱える研究者が登場した。そのことを受けてわが国でも日本小児科医学会が2歳まではテレビの視聴を控えめにするよう提言している。

テレビの、子どもの発達に対する影響として最も深刻なのは、すでに述べたように、テレビが子どもの、言葉によるコミュニケーションおよびそれに基づく対人関係（特に、母親〔親〕との関係）をないがしろにすると同時に、テレビに長時間向き合うことで言葉遅滞の子どもを作り出してしまうということである。こうしたメディアによる擬似的コミュニケーションでは、子どもの知性、言葉、感情のいずれも育つことはないのである。しかも、子どもたちに真正のコミュニケーションの契機を与えないということは、彼らから対人関係の中で味わう楽しみや喜びを奪い、彼らの世界を単相的なものに染め上げてしまいかねないのである。

最後に、日本小児科医学会からの提言、特にテレビ問題の先駆者である片岡直樹の提言に即してまとめると<sup>35)</sup>、「新しいタイプの言葉遅れ」を予防する方法（対策）は、次のように記述することができる。

まず第1に、テレビは消すことである。とりわけ、2歳未満の乳幼児期のテレビの視聴は禁止すべきであると考えられる。そして、言葉遅れの子どもを治療する場合は、年齢とは関係なく、全面禁止にすべきである。

第2に、テレビを視聴する場合でも、子どもが1つの番組を見終わったら、必ずスイッチを消すことである。要は、計画をもって見させることである。また、3歳児の場合は、1日1時間以内を限度とすべきである。

第3に、子どもにながら視聴はさせないことである。目的のないテレビ視聴は、ただだらと視聴時間を延ばすことにしかならないので、極力させないことである。

第4に、子どもに録画しての繰り返し視聴はさせないことである。実は、ビデオレンタル代が値下げした1995

（平成7）年頃から子どものテレビ・ビデオ視聴の時間が長くなっている。ビデオのレンタル料金の値下がり、言葉遅れの子どもの増加とのあいだには相関関係が推測される。その意味で、ビデオの「大衆化＝大量消費化」には留意すべきであろう。

第5に、第4との関係で家庭では市販作品（ビデオ）は買わないことである。

第6に、家族の人たち（親）が子どもと向かい合って遊ぶことを厭わないことである。

第7に、第6とほぼ同じことであるが、家族の人たち（親）が抱っこやスキンシップを惜しまないことである。

第8に、何度も繰り返し強調したことであるが、家族の人たち（親）が子どもと一緒に絵本を読むことである。特に、母子間の共同注視（二者間「内」交流および二者間「外」交流）という伝統文化をもつわが国の場合、母子間の共同注視の現代版とも言うべき、絵本の読み聞かせの意義は、何度強調しても強調し足りない。母子間の絵本による共同注視は、母子間のかかわりや言葉によるコミュニケーションを促進するだけではなく、テレビによる子どもの発達問題をも解消する契機となり得る。今後、一部の図書館や保健所で開始されたブックスタート運動の普及が目ざされよう。

第9に、第8とほぼ同じであるが、家族の人たち（親）が子どもと一緒に歌を唄うことである。歌や音楽は、言葉の原初であり、一体化を生成するフレームを内蔵している。その意味で子どもの豊かな言語発達を促進させるだけでなく、それを介して両者がふれあう契機となろう。

第10に、親が子どもと添い寝することである。これは第7とほぼ同様の教育効果が期待される。

第11に、家族の人たち（親）が家庭においても戸外においても、子どもと常に身体と言葉で語りかけることである。

第12に、家族の人たち（親）が子どもをごっこ遊びや見立て遊びに導くことである。それは、子どものイメージネーションを豊かなものにしていくという効果をもたらす。しかも、その活動を契機に子どもは、抽象的思考力の土台を構築していくことができよう。また、大人と子どもとのあいだでなされる、遊びあるいは遊戯療法としてスキグル（「スキグル・ゲーム」<sup>36)</sup>）がある。それは、たとえば親が描いた絵を子どもが何かに見立て、それに何かを描き加えていくというものである（当然、順序は逆になってもよい）。それはわが国の連歌・連句文化に通底するものであり、見立て（＝連想）をする過程で他者とのアソシエーション（連想）、すなわち心のつながりを行っていくというものである。一例を挙げると、

ある子どもが画布を真っ黒に塗り潰したとき、大人はウイトを働かせてその、黒く塗り潰された画布を「夜空」に見立てることにより、そこに「星々」や「(夜間飛行している)飛行機」を描き込んだ。ここにはまったく思いがけない形での、大人と子どもとの心のつながりがあると考えられる。

第13に、長時間のテレビ・ビデオ視聴につながる偏った早期教育は行わないことである。

第14に、家族の人たち(親)は、子どもとテレビを見るよりも実体験を共有することである。実体験の少ない子どもにとって生活のシミュレーションは不要である。そのことは、子どもの五感(感性)を鍛え、現実の土台を構築する契機となる。

第15に、家族の人たち(親)は、食事するとき、テレビを消すか、あるいは食事をする部屋にはテレビを置かないことである。前述したように、テレビのついているときとついていないときでは、子どもとの会話はまったく異なっていた。勿論、テレビのついていないときの方がはるかに、子どもとの会話は多いし、自然と多くなる。

以上、マルチメディアとしてのテレビは、子ども(特に、乳幼児)の発達に深刻な影響を与えるがゆえに、次世代のために早急にしかるべき対策が取られるべきである。

## 注釈

- 1) 日本小児科医会「子どもとメディア」対策委員会のホームページ([http://jpa.umin.jp/info\\_2.htm](http://jpa.umin.jp/info_2.htm))およびコモ編集部編：『テレビに子育てをまかせていませんか』、主婦の友社、147-158(2004)参照
- 2) 土谷みち子：「乳幼児期のビデオ視聴スタイルと子どもの発達」、第46回日本小児保健学会講演集、226-227(1999)
- 3) 同上
- 4) 片岡直樹：『テレビ・ビデオが子どもの心を破壊している!』、メタモル出版、13-14(2001)および片岡直樹：「テレビを観ると子どもが喋れなくなる」、新潮45、20-11、132-139(2001)参照
- 5) 片岡直樹：「新しいタイプの言葉遅れの子どもたち 長時間のテレビ・ビデオ視聴の影響」、チャイルドヘルス、4-1、51-53(2001)
- 6) 片岡直樹：前掲書、37(2001)参照
- 7) 中野 収：『「家族する」家族』、有斐閣、42-81(1992)
- 8) 神山 潤：『子どもの睡眠』芽ばえ社、20-21(2003)
- 9) 藤竹 暁：「環境となったテレビ」、思想、956、3

(2003)

- 10) 平成15年度・文部科学省基盤研究B(2) [課題番号15300246] 『大都市圏に暮らす子どもの生活問題と生活改善のあり方に関する総合的研究』(研究代表・中井孝章)におけるアンケート調査で寄せられた、保護者からのコメントや手紙による。
- 11) 高橋剛夫：「感覚刺激とテレビ」、季刊デザイン、3、76-77(2003)
- 12) 岩佐京子：『テレビが幼児をダメにする!!』、コスモトゥーワン、90-92(1998)
- 13) 中井孝章：『「子ども」の誕生と消滅』、日本教育研究センター、1-170(2004)
- 14) 北山 修：『幻滅論』、みすず書房、54(2001)
- 15) Moore,C.& Dunham,P.J., *Joint Attention: Its Origins and Role in Development*, Lawrence Erlbaum Associates, 1995 = C.ムーア, P.J.ダンハム：『ジョイント・アテンション』大神英裕訳、ナカニシヤ出版、1999
- 16) 北山 修：前掲書、49(2001)
- 17) 山口 創：『子供の「脳」は肌にある』、光文社、26-85(2004)
- 18) 同上：74-77(2004)
- 19) 岩佐京子：『危険!テレビが幼児をダメにする!!』、コスモトゥーワン、100-103(1998)
- 20) 道又爾：「認知心理学の二つの顔」、imago、3-6、39(1992)
- 21) Condon,W.S., " Neonatal Entrainment and Enculturation ", Bullowa,M.(ed.), *Before Speech*, Cambridge University Press, 1979 = W.コンドン：「乳児の呼応性と文化習得」、A.ロック、M.プロワ、鯨岡 峻編訳者・鯨岡和子訳：『母と子のあいだ 初期コミュニケーションの発達』、ミネルヴァ書房、239-258(1989)
- 22) 同上、246(1989)
- 23) 同上、250(1989)
- 24) Condon,W.S., *An Analysis of Behavioral Organization*, *Sign Language*, 13, 285-318(1976)
- 25) 菅原和孝：「日常会話における自己接触行動 微小な<経験>の自然誌に向けて」、季刊人類学、18-1、130-200(1987)
- 26) Condon, *ibid*(1976)
- 27) 小川信夫：『情報社会の子どもたち』、玉川大学出版部、60(1993)
- 28) 大平 健：『<遊>と<狂> 言語・行為・表情』、金剛出版、185(1984)

- 29) [http://www.shinfujin.gr.jp/josei/2000/2000\\_11\\_04.html](http://www.shinfujin.gr.jp/josei/2000/2000_11_04.html)
- 30) 中井孝章：「高度経済成長期の子ども60年代」, 下山田裕彦・高橋 勝編『子どもの暮らしの社会史』, 川島書店, 101-102(1995)
- 31) Healy, J., M., *Failure to Connect: How Computers Affect our Children's Minds, for Better and Worse*, Simon & Schuster, New York, 1988 = J.M. ハーリー, 西村辨作・山田詩津夫訳：『コンピュータが子どもの心を変える』大修館書店, 1999
- 32) Damasi, A.R., *Descartes' Error: Emotion, Reason, and the Human Brain*, William Morris Agency, Inc, 1994 = A.R. ダマシオ：『生存する脳』, 田中三彦訳, 講談社, 24-375(2000)
- 33) NPOブックスタート支援スタート：『ブックスタート・ハンドブック2004年度(平成16年度)版』, 4-30 (2003)およびNPOブックスタート支援スタート：『第1回 ブックスタート全国大会 本のひととき 赤ちゃんといっしょ』, 2-48(2002)
- 34) Postman, N., *The Disappearance of Childhood*, Dell Publishing Company, 1982 = N.ポストマン：『子どもはもういない』, 小柴 一訳, 新樹社, 121(2001)
- 35) 片岡直樹：『テレビ・ビデオが子どもの心を破壊している!』, メタモル出版, 132-142(2001)
- 36) 白川佳代子：『子どものスキグル ウイニコットと遊び』, 誠信書房, 1-189(2001)

## テレビの進化と現在の子どもの発達問題

### —生活科学的アプローチ—

中井 孝章

要旨：テレビは、高性能化やデジタル放送などによって日々進化し続けている。その一方で、テレビを子どもたち、特に乳幼児が長時間見ることにより、自閉症に特徴的にみられるような言葉遅れ（発達遅滞）が生じ、社会問題となりつつある。従って私たちはテレビ番組の内容の善し悪しについて検討する以前に、テレビそのもの、すなわちテレビという「メディア＝形式」を問題にしなければならない。つまり、テレビの、子どもたちへの深刻な影響としては、何よりも(1)親子間のコミュニケーション（W.コンドンのいう、それに埋め込まれた、相互作用の同期性）の阻害、さらにはそれを基礎とする対人関係の阻害、(2)イメージの未発達に伴う言語発達の遅れ、(3)ありのままの感情を他者に向けて暴露することを良しとする、歪んだ「感情教育」、(4)明確な表情しか理解できなくなるアニメ的人間理解、(5)映像と音の過剰刺激による身体的、精神的ダメージ、(6)テレビ・コマーシャルによる消費欲望の拡大、等々が挙げられる。

子どもへのテレビ対策としては、2歳までは一切テレビやビデオを見せないことが原則となるが、それに加えて例えば、わが国の伝統文化としての親子の共同注視およびその現代版としての絵本（ブックスタート運動）の普及がその対策として考えられる。いずれにしても、わが国では長時間テレビ視聴する、子どもたちに対するテレビガイドラインの確立が求められている。